

子どもが体験した沖縄戦

古堅中学校 三年六組 伊狩 吉尚朗

「吉尚朗、これだけは覚えておきなさいよ」と
んなことがあっても絶対に戦争という道は選
んだらダメだよ。戦争は何もかも変えていっ
てしまっし、うばってしまっからね絶対戦争
はやったらダメだよ。」

この言葉は私の祖母であり戦争体験者であ
る伊狩典子がよく私に言っていた言葉です。

戦争で祖母は熊本に疎開してはいたものの

二番目の兄と、ひめゆり学徒隊に行っただ友達
を失いました。今の私達くらいの年代だっ
たそうです。

そこで私は、ひめゆり学徒隊のように、私
達と近い年代で作られた部隊にはどのような
ものがあるか調べてみました。鉄血勤皇隊や
ひめゆり学徒隊など、いろんな部隊がでてく
る中で一つ気になった部隊がありました。そ
の部隊の名は「護郷隊」といって主に十五歳
から十七歳で編成された部隊で、沖縄戦で唯

一ゲリラ戦をした部隊です。そんな護郷隊について深く知りたくな。た私は思納村の博物館に家族で行きました。するとそこには、訓練の時にひどい仕打ちをうけたり、近くで自分の仲間が死んでも何も感じない状態になったりして、地獄のような光景が広がっていました。その博物館の展示の中で一番心が痛くな。た言葉があります。それは、
「10人だ。た。た10人殺せば死んでもいいぞ。」
という教官が護郷隊の少年に言った一言です。

私とほとんど同じ年の子に、銃を持たせ、地獄のような訓練をし、残酷な仕打ちをしては10人殺せば死んでもいい、お国のために命を捧げるなどと言う。こんなことを平気でしている大人達にとても腹が立ちました。戦争といつ国と国の争いに子どもまでも巻き込み、将来国を担うはずの国の宝を奪ったあのころのこの国に、もつと腹が立ちました。
この護郷隊のことを知って、母は私に、
「あなたと同じくらい歳の子たちが、親元

をばなれてあんなおこいことをされて、無惨
な死に方をするのは、親として本当に見てい
るのかつらい。それにあなたがあの時代で、
あんなおこいことをされていると考えたら、
涙が出てくるよ。
と、涙もうかべながら、私に言ってきた。
そのとき私は祖母の言っていた、戦争は何
もかも変えてしまうし、何もかも奪っていっ
てしまつて、という言葉思い出しました。た
しかに戦争は、人の心の余裕を奪って、人を
人ではない化け物に変えてしまうし、戦争は
子ども達の将来を奪ったり、大事な人の命を
奪ったり、国と国の信頼も奪ってしまう。と
いうことを祖母のあの言葉は言っていたんだ
ろうなと感じました。

最後に私達がこれからの日本を引張って
いくときに戦争をしないためにしなくてはな
らないことが二つあります。
一つ目は、互いに支え合い助け合うことで
す。なぜなら、こまっっている人がいたら、互

い様だと考えて誰であるつと手をさしのべてあげろ。そして、みんなで協力して団結していけばどんなことも乗り越えられることができるからです。

二つ目は、互いに仲良くし合うという事です。なぜなら、もめて、少しの争いから、どんな大きなことまで大きな争いに発展していく可能性があるからです。

この二つをみんなを守って行って、二度とあのような悲劇を繰り返さないようにしていきたいです。